

分科会報告

〔第二分科会〕 地域づくり・農業と子どもの発達

「食」・「農」・「教育」を軸に 地域づくりのネットワークを

高橋 武昌

参加者は、教員七名、自治体議員二名、農民三名、農業研究者二名、農協労働者二名、自治体労働者一名、おやこ劇場関係者一名、学生二名の計二〇名であった。

レポートの概要

レポート①

「今、農業に求められているもの——農業高校の現状と地域から期待されているもの」

内山 雄平（新潟・新発田農業高校）

開会記念講演で、長崎明先生が新潟県の農業の実態について述べられたが、内山先生の報告はそれをさらに具体化

する内容であった。

昭和四〇年（一九六五）の県内農家戸数は二〇万四千戸であったが、昭和六三年（一九八八）には一四万八千戸に減り、一種兼業と二種兼業がまったく逆転してしまった。また農家所得でも、昭和四〇年に農外所得四三パーセントだったのが昭和六三年には八二パーセントとなっている。こうした状況をみただけでも、農民の心を荒廃させてきた「減反」政策・コメ自由化政策が、本県農業に与えてきた影響は大きいといえる。

農業後継者は昨年わずかに八七名、県農業大学校卒業者を入れても一二名で、一市町村一名弱である。教育の面でもその影響を受けないわけはなく、新発田農業高校農業科の場合、昭和三七年には二六名在学していたのだったの



が、昭和六三年には一一名の激減となった。また、農業そのものの危機は学科の多様化を生み出し、農業科の定員が減らされて農業経済科が増やされ続けてきた。不本意入学が増えるなかで登校拒否や怠学の生徒が増えており、このことが教育実践の大きな課題となっている。

内山先生は、本県農業と農業教育の現状をふまえて、次のような実践をすすめていると報告した。

① 地域の人から学ぶ農業——地域で努力しがんばっている農家の実情を、生徒に、地域の人から話してもらっている。PTA会長をはじめ熱心な方々が、例えばコンピュータを導入して農業をやっている等の話をして

くれたが、その人たちが共通して述べたことは「基礎学力をきちんとつけてほしい」ということであった。

② 村上・新発田支部（教組）教研の活動——「食と農と教育を語るつどい」を開催した。外国農産物攻勢のもとで、兼業農家の食生活も大きく変化してきている。そんななかで子どもがどのように育っているか、農業改良普及所の方を招いて話してもらい、地域農業のあり方と食文化について教職員・父母・生徒で学習をすすめている。

レポート②

「子どもたちと食文化について考える」

大塵 英雄（福島・加納小学校）

「緑の自然を守ろう・自分の健康を守ろう」を学級の目標にかかげて無農薬栽培と食品公害にとりくんだ、たのしく豊かな実践の報告であった。

子どもたちには、取り組むめあてを具体的に七項目示している。

- 身近にある草花の名前を覚えよう
- 好きな草花をタネから育ててみよう
- 自分の家で生産している作物について知ろう
- 花壇に花を咲かせよう
- 無農薬で、米を作ろう

。自然について学習しよう

。今食べているものについて、考えてみよう

例えば「無農薬で米を作ろう」(五、六年)の取り組みでは、「人間が生きているということ、大自然のもつ命との関わりについて」というテーマで、農協の営農部長さんから九〇分のお話を聞くことから始めている。ちなみにこの小学校は現地産の有機無農薬米による学校給食を今年度からスタートさせたが、農協がその実現のきっかけをつくってくれたという。営農部長さんの話を聞いて子どもは、生体のリズムや食の深い意味について考えている。年間を通じて、田植え、除草、稗ぬき(三、四年生)、脱穀(全校)、『収穫祭』の生産活動が展開される。

参加者の注目を集めたのは「食べもの調べ」であった。

野菜が無農薬なのかどうかという関心は、当然子どもたちが食べているおやつにまでそれは及ぶ。そこで、日頃食べている、氷菓・スナック・あめ・ガム・魚介、肉などの袋を持ち寄り、安全か否かの学習が始まった。食品添加物のテキストをつくり、「おやつは安全か」という学習の上になつて栄養士、養護教諭とも話し合いをすすめ、全職員で討議して「おやつ安全カード」を全校児童に配布した。

子どもたちは「おやつあんぜんカード」を持って店へ行く、そして、自分で安全か否かを手にとって調べるようになる。

6/5(木)

香

「健康について」

合成保存料だとか、ヤシ油などわたし達の好きな食べ物には、この二つ以外にいろんな薬品が入っているのがある。こういう薬品は、体にとって不利で体に害をあたえるということをならった。かかったら、早く見つかると、手だてはあるが、一〇〇%たすかるとはいえないガンのもとなのだということもならった。わたしは、今まで、ヤシ油が入っているアイス、などいろいろと食べてきた。三〇代位になるとなるかもしれない。今、学級では、わたし達のすきなおやつなどいろいろ買い、なんというおかしに何が入っていると書き記録していけば、それをさけガンになるのを防げると思うことでがんばっている。今日、おやつに、パン1枚、クッキー3枚、など食べた。見るとパンには、どこにも入っているとは、書いてなかった。がクッキーに合成保存料、ヤシ油が入っていた。(食べるにあぶない)と思っても(食べたい!)という気持ちにまけ食べてしまった。自分で(じゅ命を短くしているだけだな)なんて思った。自分の体は、自分でかんりしなくてはならない。

【資料】

平成元年7月4日

保護者殿

加納小学校長 目 黒 寅 一

「おやつ あんぜんカード」の利用のお願いについて

うとうしい日が続いておりますが、みなさまにはますますご清栄のことと存じます。さて、学校では5月より、児童に安全でおいしいごはんを食べさせるために、当村産の有機低農薬米による学校給食を実施し、給食も添加物の少ない物と心がけております。

しかし、過日、5・6年生を対象に実施しました「食品摂取状況調査」のおやつを見ると、児童の多くは、体に害のある添加物の多い食品を食べていることがわかりました。このことについては学期末懇談会の全体会でくわしくお話いたしますが、とりあえず、「おやつ あんぜんカード」を作成しましたので子どもに食べさせる食品を買うときの参考にいただければ幸いです。

おやつ あんぜんカード の利用のしかた

◎例

種類・・ラクトアイス

無脂乳固形分・・8.5% 植物性脂肪分・・15%

原材料：果糖ぶどう糖液糖、植物性脂肪（パーム油・ヤシ油）

安定剤・乳化剤・着色料・合成着色料

おやつ あんぜん カード

加納小学校

◇10点満点……5点以上なら、まあ、安心

着色料（βカロチンは○）	-10点
ジュース（100%果汁は○）	-10点
ポテトチップス	-10点
保存料	-5点
発色剤	-5点
酸化防止剤	-5点
乳化剤	-3点
安定剤	-3点
着色料	-3点
甘味料	-3点
改良剤	-3点
ヤシ油・パーム油	-3点
糊料	-3点
調味料	-1点
膨張剤	-1点
強化剤	-1点

1つの食品の持ち点は10点です。そこから、その食品に添加されている添加物の減点数を引き、残った点数が5点以上ならまあ、あんしんとします。

上記のラクトアイスの減点数は、

パーム油・ヤシ油……3点

安 定 剤……3点

乳 化 剤……3点

着 香 料……3点

着 色 料……10点

合 計 -22点

持ち点の10点から引くと、-12点ですから、子どものおやつには適さない食品というわけです。

なお、右記の点数は、必要性等を考慮し、先生方が考えた暫定的なものです。

そだちざかりの子ども達に、より安全なものを食べさせましょう！



この実践を通

して子どもたちは、地域の人たちや家族に、何が危険で何が大切なのかを具体的に知らせている。実際、農協では、無公害の菓子や飲料をおくようになったり、無公害カシが村のカカシ・コンクールで大賞をとって地域の人々の関心をよんだ。さらに村の小・中学校の「子どもの主張大会」で加納小学校の五、六年の代表（二人）は、食品添加物の問題をテーマに発表し、村長、教育長、議員をはじめとした村の多くの人たちに、新しい食・農の問題を考えるよう訴えている。

生きるという意味を教育のなかで改めて問い直す感動的な実践報告であった。

討論とまとめ

前日の開会行事から二日目の分科会に及び、農業をとりまく生産場面での荒廃状況、さらには食文化をめぐる問題状況が一層リアルに提示された。農業は食糧の問題としてだけ存在するのでなく、人間を耕し人間を人間らしくしてきた本来それが持っている教育・文化の側面を、今回は改めて考えさせられた。

東京農産高校、恵邦農業高校からの、偏差値輪切りの受験体制のなかで農業とは無関係な気持ちで入学してきた生徒たちが、米を生産し収穫までとりくむ学習のなかで（はじめは遊びだったものが）、二年目あたりから目の輝きととりくみの姿勢が変わってくるという実践報告は感動的であった。

そうした生産活動を小・中学生の時代に体験させるということがもっと大切だということで、新潟市大江山地区での実践が語られた。小学校の学校給食に地元でとれる野菜を入れることの意味、中学校での労働体験学習のなかで、子どもは「働くこと」を日常的な「食べること」のなかに発見し、農民は、子どもによって、よりよいもの・より安全なものを生き生きと作るよろこびを感じてがんばっているという発言であった。主婦として、母親としてがんばっ

ている二七歳の農民の、「私は農業のことは何も知らないで嫁过来了。しかし、農業は家族みんなに支えられ、楽しい。子どもに『きょうの野菜、買ってくる人いた?』と聞かれ、励みになっている」という発言に、改めて農業の意味を教えられた。

「食」の安全性については、父母・市民の立場からの話し合いもできた。参加した女性たちは、生命を宿す母体として「食公害」に最大の関心を寄せるべきだと発言した。その認識に立って、地域で「食・農・教育」の学習会をすすめているとりくみが紹介された。また、ある農協労働者からは「農協職員としての生き残りの道は、何としても農業を守り、安心して生きられる『食』を地元から考え、つくりあげていくこと」の必要性が述べられ、午後の「地域づくり運動」への視点が示された。

まとめ

ア、地域のこと、農業のことを、今子どもにきちんと教えるなかが必要である。

例えば、「生活科」が小学校の課程に入ってくるなかで、田んぼづくり・畑づくりは学校でどう位置づけていくのか、新指導要領実施のなかで、農・食についてどう教育していったらよいのかなど、議論の要あり。

イ、農山村の子育てに危機的状況がある。二種兼業農家では、主婦は時間を奪われ、その労賃が値切られている。新潟集会では学ぶ意味は深い。

ウ、物と人とのかわりを、今とらえなおすことが求められている。「人の顔が見える物」をどう、みんなでつくっていくかである。大塵実践も、物のなかに生命・人間を発見している。それは、子どもの立場からいえば、生きるための選択能力をつけているということでもある。

レポートの概要

レポート③

「大江山の健康朝市はこんなに楽しく始まった」

稲田 吉男（新潟・大江山農業と

くらしをつくる会）

農民は切り捨てられてきた。しかし農政が悪いというだけでは通らない。私たちは、一昨年、農民連の小林節夫氏を招き、これからの展望を語ってもらった。昨年は、千葉県多古町、東京品川区の学校給食、さらに横浜港での輸入

食品の状況を視察した。今年は、「農民の手で、農業で生きる意味を朝市で示したい」と考えた。六月から始めたが第一回目の前日は、夜おそくまでねむれなかった。しかし翌日、六〇〇人もの方々が来てくれて大成功。十一月までつづけたが、そのなかで、いつもとれたての野菜を求めてくれるお母さんと話し合ったり、おはぎや漬物をつくって売って大好評であつたりした。私たちは、物を売ればよい、安全であればよいということだけでなく、「求め」の心に支えられて、ものをつくり、売ることができたと思つてゐる。これまでは、自分たちで値段を付け、自分たちの創意で売ったことは一回もなかった。みんな市場や農協まかせだった。そういうことで、農民としてやる気がつよくなつた。「健康朝市」（日曜日）には子どもたちも連れてゐる。

レポート④

「子どもの発達と」

「食」と「農」を語り合う豊浦町大交流集会」

上村 啓（新潟・北蒲原、新発田

教職員組合）

標記の集会は、四か月の準備が実り、一昨年十二月四日（日）約五〇〇人の参加を得て、成功裏におわつた。そし

感想

子育ては地域住民協同のしごと

高橋 美緒子

新発田農業高校では入学者の半数近くが非農家の子どもであること、どこか家庭でも季節の食文化として家族総出で作つていた笹だんごを、最近はいじちゃんばあちゃんが若い者に気兼ねしてこっそり作つてゐる、などの発表を聞き、農家が農業に対する愛着さえも捨ててゐると感じました。子どもたちも受け継ぐ場、育つ場を失つてゐるわけです。小国町の保母さんは、「子どもが変つた」と危惧を抱き、地域に根ざす保育所のあり方を求めて、町を挙げて取り組んでゐるそうですが、幼児期に母親がかかわるべきこと、家庭で仕付けなければならぬということがされないままで入園してくる……という話は、新発田農業高校の先生の笹だんごの話と共通しているように思ふなりません。そんな中で、大江山健康朝市の発表は、農政に流される農家、受け身の農家から脱して、農家の手で朝市組合を作り、消費者の顔を見ながら売ることの楽しさを味わい、消費者からも喜んでもらったという発表でした。「いい農業をやれば、いい後

て現在もこの実行委員会は目標をもって活動中である。

実行委員会は、豊浦町教職員・農協職員・町PTA連絡協議会・農団連が中心になり、町当局・町教委・商工会・保育所保護者会・高校生を持つ親の会などが後援した。

食糧が危ない、基幹産業である農業が危ないという意識からくる、「一体、どうなっているの」「なんとかしなければ」「待っていました」という広まりであり深まりであった。「各先生方の現場からの報告を聞き、中学生の親として、食品についてもっと気をつけ勉強しなくてはと、つくづく感じた」「主食のコメも輸入となったら、食生活は不安です。目に見えるところでつくる食物を安心して食べられるような農業が豊浦町でできたら」の声が聞こえてきた。農協労働者は、「安全な食糧と地域農業の発展について少しでも理解が広まれば……」という気持ちですすめたと云っている。

まず、保育者、小・中・高校の教師による「現場からの報告」、次いで、生協役員・農民・歯科医・教師によるパネル・ディスカッションで、子どもの食生活の乱れ、農業の持つ教育的・社会的な意味が明らかにされた。記念講演は、学校給食研究家・雨宮正子さんであった。実行委員たちはこの集会の成功で、自分たちの町は自分たちの力で変えることができるという実感を持った。この集会後、月岡温泉で働く婦人たちの間で学童保育所をつくる運動が起

継者を育てることにつながる、農家に来てよかった」と、非農家から嫁いだと言う若いお母さんの笑顔が大変さわやかでした。

この分科会で最も話題を呼んだのは、福島県加納小学校で取り組んだ「おやつ反省カード」でした。学校給食に村で取れた低農薬有機米を使用、野菜もこの誰が作ったものと毎日放送したことがきっかけとなって、子どもたちが自分の食べるおやつの添加物点検を始め、子どもの力で食品の安全に対する親の意識を変えつつあるというものでした。

豊浦町が「子どもの発達と食と農を語り合う大交流集会」を町を挙げて開いたという発表も、農業破壊からくる地域の変貌が子どもたちを悲惨な状況に追いやっていくことに気づいたのが発端だったそうです。

このように、地域づくりと人づくりが効を奏したみなさんの発表でした。基幹産業の農業の衰退が子育てにこんなにも影響を及ぼすものと、改めて痛感しました。そして、地域のそこに住む一住民達が起こす教育・文化運動が、これほど確かで力強いものはないと思います。ただ、福島先生が話された宮沢賢治の世界は、再び取り返すことができないと思うと寂しいことです。

(新潟県子ども劇場・おやこ劇場連絡協議会)

り、今すめられている。

レポート⑤

「地域に根ざす保育所のあり方を求めて」

細井 良雄(新潟・小国町)

役場職員組合

保育所の老朽化問題をきっかけに、保母と親と職員組合が話し合いを始めた。「子どもたちをどう成長・発達させるか」から出発し、「行革」の中での運営の問題・長時間保育の要求・保育料軽減の要求・働きやすい労働条件の問題・ゆきとどいた保育を求める要求等について、対等の話し合いが続けられている。農業に見通しがもちににくい今日、保育の問題を軸にして、労働組合がお互いすきなことを言い合える関係をつくりながら、町づくりの視点に立って研究をすすめている点がすばらしい。

討論とまとめ

ア、今、地域のための保育所づくり・高校づくりが求められる。このことは、地域農業の見直しでもあり、地域づくりの大きな力のひとつになる。小国町でいえば、保母も含めた保育政策づくりが、町の職員組合に求められて

いる。

イ、大江山の「健康朝市」も、豊浦に代表される「食・農・教育のネットワークづくり」も、「自分の地域農業や子育て・教育をどうするか」に端を発し、今までにない地域づくり統一戦線の可能性と実態とをもっているといっている。住民の自治がつくられつつある明るい見通しをもった実践である。それは、子ども・青年の人間らしい発達を掲げながら、農民・主婦・労働者がともに発達できる地域の協同から始まっている。新潟県の場合、教職員の果たした役割は重要であり特徴的である。

ウ、家庭の文化・行事がどうなっているか考えてみる必要がある。それは、地域文化と不離のものである。そこから地域を見直したい。

エ、地域産業の後継者養成は、おとながその労働のなかでの生きざまを見せていくなかで可能である。親と息子との協同労働の場面で、息子は人間を発見していく。アイヌ人は「お金は個人のものだ。自然を豊かにすることは個人の貯金のためではない。みんなのためだ」という。地域を継承し、営みを伝えていく人たちを、いま見出すときである。(たかはし たけまさ＝新潟・南中野山小学校)